様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ５ 月 １３ 日現在

機関番号：２４５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２６６９

研究課題名（和文）印欧祖語とラテン語の中間段階がもつ言語特徴について

研究課題名（英文）Linguistic Features in Intermediate Stages between Proto-Indo-European and Latin

研究代表者
西村　周浩（Nishimura, Kanehiro）

神戸市外国語大学・外国学研究所・客員研究員

研究者番号：５０６０９８０７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：印欧語族を扱う比較言語学は、紀元前4千年紀に存在したとされる「印欧祖語」を理論的に再建し、そこから諸々の言語が分岐したと考える。それゆえ、個々の語派・言語の歴史は、最古の言語資料が現われるよりも前の時代に遡ることができる。本研究は、ラテン語を含むイタリック語派が、印欧祖語からどのような通時的推移を経たのか、その中間段階にアプローチし、音韻・形態・意味の面においてバランスよく成果を得ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日常何気なく使っている言語。我々の目には終始変わることのない一様な実体のように映ることがある。しかし、その背景には長い歴史が横たわっており、その過程で言語はあらゆる面についてその姿を変えている。これは未来についても当てはまることである。つまり、人間の営みは、細波のように揺れ続ける言語の上に成り立っていると言える。言語の歴史の一端を明らかにするということは、学術的好奇心を満たすだけなく、揺らぐ言語に支えられる社会とは何なのかを見つめるきっかけとなるだろう。

研究成果の概要（英文）：Indo-European Comparative Linguistics rests on the premise that there was a common ancestor spoken in the fourth millennium BCE, which evolved into the Indo-European languages. Therefore, the history of individual branches and languages can be traced back to the era before their earliest linguistic data appeared. In this project, by approaching intermediate stages from Proto-Indo-European to the Italic languages, including Latin, and examining diachronic transitions, we could obtain meaningful outcomes comprising phonology, morphology,and semantics.

研究分野：人文学

キーワード：ラテン語　イタリック語派　印欧祖語　派生接辞　アスペクト　音韻変化　動詞派生名詞

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

ギリシア語・ラテン語などヨーロッパの諸言語がインドのサンスクリット語などとともに共通の祖先である言語、「印欧祖語」から分化したとする説が W. Jones によって提唱されたのは 200 年以上も前のことである。以来、様々な言語を対象に音韻・形態などの面において膨大な数の成果が積み上げられ、印欧祖語の姿、および特定語派・言語へと至る歴史が次々に詳らかとなっていったが、いまだ未解決の問題も多数残されている。このことは、ラテン語、そして同じイタリック語派に属するサベル諸語にも当てはまる。どの言語特徴を印欧祖語の古い特徴を反映するものとするのか、それがラテン語ないしサベル諸語のみに見られるものなのか、あるいは両者に共通するものなのか、判断の難しいケースが数多く存在するからである。こうした状況のもと、印欧祖語からラテン語を含むイタリック諸語に至る歴史において、中間段階の指標となる変化や言語特徴の明確化を押し進めるべきだと感じていた。

２．研究の目的

言語の歴史と言えば、ある時代の資料と別の時代の資料を見比べることで、変化の流れを把握し、可能な限りその要因を突きとめるというプロセスが真っ先に思い浮かぶであろう。しかし、印欧語比較言語学の場合、ギリシア語やサンスクリット語などの多岐にわたる言語データを用いることで、「印欧祖語」という今は失われた段階を理論的に設定することが可能であるため、我々が直接知りえる言語資料の時代よりも前、すなわち先史時代の言語の歴史が考察の対象となるという利点がある。その一方で、資料の制約上、印欧祖語の段階から個別の語派・言語に至る流れは紆余曲折のない直線的なものとして捉えられることが多く、際立った分岐点は別として、細かい中間段階を設定したり、その座標の値となる特徴を同定したりすることは決して容易ではない。ラテン語を含むイタリック語派もそうした難しさを抱えている。ただ、紀元前約 700 年以降脈々と続く碑文や写本の伝統は 21 世紀に入ってからも実証的な研究の対象となり続け、碑文集や原典校訂版、語源辞典、文法書など様々な成果が生み出されている。このような新たな展開の中で、本件は上記難題の解明に貢献し、ラテン語の言語史全体に波及効果を与えることを研究目的とした。

３．研究の方法

印欧祖語の時代からラテン語を含むイタリック諸語がどのような言語変化を経て現存する資料のような姿へと至ったのか――私の研究の基底に常に存在する問いである。これに答えていくにあたり、私が原則としている方針も長年共通している。つまり、(a) イタリック語派の諸言語が他の印欧諸語と異なっている点を抽出し、その違いの原因となる変化のメカニズムを構築する、(b) イタリック諸語内部における不規則な言語現象を探り当て、その動機付けを行う、というものである。この 2 点を軸に据えた上で、本研究では両者の視点を通して浮き彫りとなる相違や変異が、言語の歴史という長いタイムスケールの中で、相対的にどのような段階に位置付けられるのか、その点を特に意識して研究を行った。具体的には、ある言語変化が古代イタリアにおいてどの程度流布していたものなのか、あるいは、いくつかの言語形式が言語構造の中でどのように互いの関係性を変えていったのか、などの問題に着目した。

４．研究成果

(1) ラテン語の *humī*「地面に／で」という語に生じた音韻変化について考察を行った。この語は *homō*「人間」と同源語があることが知られており、母音 *u* も元は *o* であったとされるが、*o* が *u* に変化した原因はこれまで不明のままであった。そこで、開音節の核となる母音が *m* の前で *u* や *o* が現われる例を集め、母音の違いが何によるものなのか分析を進めた。その過程で印欧祖語の段階における再建形を考慮し、結果としてアクセントが当該母音にあるかどうかが重要な要因になっていることを解明した。無アクセントの母音 *o* は *m* の前で *u* に変化。これを私は *humī*-rule と名付けた。*humī* の場合、最終音節にアクセントがあったことになる。これは、古典語として習うラテン語の規則とは異なっており、ラテン語の歴史の古層に想定される初頭音節強勢付与規則とも違う。このことから、ラテン語はこれらの規則よりも以前の中間段階において印欧祖語のアクセント規則を一定期間保っていたことが分かった。この研究成果は、UCLA の Brent Vine 教授の記念論集に掲載されている。

(2) 動詞語根から行為名詞を派生する接尾辞-*ti*-と-*tu*-の研究に関しては、ラテン語の *fors*（*ti* 語幹）と *fortūna*（*tu* 語幹からの派生語）という二つの名詞が立脚点で、ともに印欧祖語の動詞語根*b^h*er*-（ラテン語では *ferō*「運ぶ」に引き継がれている）から作られている。両者は意味の面で共通性（「運」など）をもつが、使用される文脈を調べてみると相違があることが判明。これら以外にも、同じ動詞語根から-*ti*-と-*tu*-の両方によって派生語が形成されるケースを調べた結果、二つの接尾辞が異なるアスペクトを示すことを明らかにした。特に-*tu*-の方は動作の完了・結果までを含意する行為名詞を形成する。-*ti*-と-*tu*-はラテン語内部において特段セットで使い分けが行われているわけではない。しかし、本研究により、Pre-Latin の時代、印欧祖語との中間段階において、アスペクトに関して対立的な関係にあることが分かった。この研究成果は平成 29 年度に開催された国際ラテン語学会の論文集に発表された。

(3) ラテン語の形容詞の中でも接尾辞-*wo*-/-*uo*-によって作られているものに着目。この接尾辞は主に動詞語根に付与されるが、その形成法によって派生される形容詞の意味には語根が表わす動作の結果状態が含意されていることがデータから浮き彫りとなった。このことから接尾辞内の *w*/*u* が特にそうしたアスペクト標示の役割を担っているという仮説を提唱した。歴史時代におけるラテン語の共時的な視点からは見えにくいそうした機能も、印欧祖語へ一歩二歩、段階を近づけることで明らかとなった。この研究内容は平成 30 年度にドイツで行われた単発の学会において発表し、現在準備されている論文集に掲載される予定である。

(4) 印欧祖語と古典ラテン語の間に位置付けられていた語形が、幻であるという可能性もある。古代ローマの軍神マルス *Mārs* の呼称には *Māvors* という別形がある。先行研究においては後者が音韻変化を受けて前者の語形へと至ったとされ、この仮説を元に印欧祖語でどのようにこの神格名を再建すべきかしばしば論じられてきた。しかし、私の以前の研究において、*Māvors* は **Māmars* というまた別の呼称から音韻変化によって二次的に生じたもので、*Mārs* はまた別個に存在していたと主張していた。ただ、*Māvors* の方が古拙的とローマ人らによっても考えられていた（つまり、誤解されていた）可能性が高く、荘重な祈願表現などに頻出するようになった。その実例を特定の哲学者の著作において探り当て、その成果は論文としてすでに出版した。

(5) サベル諸語はラテン語以上に母音の脱落、シンコピーを被ったことで知られるが、その変化が生じる前段階で設定される条件に関しては、先行研究において辻褄合わせのような説明がしばしば見られる。そこには、シンコピーが語内のどの位置で最初に適用されたのか、あるいは、母音によって適用に差があるのか、という二つの問題に関わっている。前者に関しては、以前にも取り組んだ最上級接尾辞に再度注目し、具体例の個別的な分析を以前のものから大きく改めた。別の音韻変化との関係性も重視し、どのようなプロセスを経て現存する最上級接尾辞の形に至ったのか明らかにした。結果として、イタリック語派内において、ラテン語とサベル諸語の間の共通性がより浮き彫りとなり、このことから、いくつかある最上級接尾辞のうちその主要なものは、遅くともイタリック共通祖語の段階ですでに形成されていたということが分かった。二つ目の問題については、よく母音 *u* が脱落の対象にならなかったとする主張が見受けられるが、これに関してもほかの音韻変化との時間的前後関係を加味することで、取り立てて *u* がシンコピーを免れたわけではないことを示した。上記いずれの成果もヨーロッパの学術雑誌に掲載されている。

(6) ラテン語の *crīnis*「髪（の房）」という語の由来に関する研究も行った。大西貞剛氏と共同研究を進め、それに関わる音韻・形態の歴史について多くのことを明らかにした。特に、その過程でギリシア語とゲルマン語における同源語を提示し、各語派における通時的なプロセスとして妥当性の高いシナリオを描くことができた。この成果はUCLAの印欧語学会において発表され、その後学会論文集に収録された。

(7) ラテン語の *Numa* という人名を詳しく扱った論文が最近出版された。私はこの人名を起源的に動詞語根から派生された普通名詞であると考え（元々「分配者」の意）、その形成法がラテン語を含め、広く印欧諸語に見られるパターンであると主張した。これにより、ラテン語の先史の段階において、そうした形態論的手法がより高い生産性を保持していたと推測される結果に至った。先行研究においては、*Numa* はエトルリア語との関連で論じられることもあったが、この研究によりその説は否定されたことになる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計10件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 Kanehiro Nishimura	４．巻 -
２．論文標題 The resultative marker *-(e)u- in Latin: Adjectives in -vus/-uus, some u-stem nouns, and perfects with -v/u-	５．発行年 2020年
３．雑誌名 To appear in the proceedings of "Jenaer Mai-Kolloquium 2018"	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Kanehiro Nishimura	４．巻 96
２．論文標題 Roman King Numa as an Indo-European Distributor	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Glotta	６．最初と最後の頁 131-147
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.13109/glot.2020.96.1.131	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Kanehiro Nishimura	４．巻 -
２．論文標題 Fors and fortuna: Linguistic and cultural aspects	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Lemmata Linguistica Latina (vol. 1): Words and Sounds	６．最初と最後の頁 192-205
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.1515/9783110647587	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Kanehiro Nishimura	４．巻 -
２．論文標題 The humi-rule in Italic	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Vina Diem Celebrent: Studies in Linguistics and Philology in Honor of Brent Vine	６．最初と最後の頁 276-287
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Kanehiro Nishimura	4．巻 -
2．論文標題 A linguistic approach to the prayer to Venus in Lucretius’ first proem: Mavors and poetic tradition	5．発行年 2019年
3．雑誌名 QAZZU warrai: Anatolian and Indo-European Studies in Honor of Kazuhiko Yoshida	6．最初と最後の頁 256-266
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Kanehiro Nishimura	4．巻 40
2．論文標題 New thoughts on Umbrian nuvime and Oscan maimas: Syncope and glide treatment in Sabellic	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Incontri Linguistici	6．最初と最後の頁 93-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.19272/201700801006	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Kanehiro Nishimura	4．巻 90
2．論文標題 Review, Romain Garnier, La derivation inverse en latin	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Gnomon	6．最初と最後の頁 367-370
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Kanehiro Nishimura	4．巻 121
2．論文標題 On syncope of u-vocalism in Sabellic: Syllable structure, glide treatment, and other phonological issues	5．発行年 2016年
3．雑誌名 Indogermanische Forschungen	6．最初と最後の頁 199-211
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1515/if-2016-0012	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Teigo Onishi and Kanehiro Nishimura	4．巻 -
2．論文標題 Inseparable etymologies: Latin crinis, Greek koreo, and related Germanic forms	5．発行年 2016年
3．雑誌名 Proceedings of the 27th Annual UCLA Indo-European Conference	6．最初と最後の頁 131-142
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Kanehiro Nishimura	4．巻 67
2．論文標題 Review, Katherine McDonald, Oscan in Southern Italy and Sicily: Evaluating Language Contact in a Fragmentary Corpus	5．発行年 2017年
3．雑誌名 The Classical Review	6．最初と最後の頁 66-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.1017/S0009840X16002201	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　4件／うち国際学会　6件）

1．発表者名 Kanehiro Nishimura
2．発表標題 The nasal infix in perfects and past participles in Latin
3．学会等名 20th International Colloquium on Latin Linguistics（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 Kanehiro Nishimura
2．発表標題 Aspect and its morphology in Latin
3．学会等名 Jenaer Mai-Kolloquium 2018 “Die italischen Sprachen: Neue Aspekte in linguistischer und philologischer Hinsicht Zur Erinnerung an Albert Debrunner”（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2018年

１．発表者名 Kanehiro Nishimura
２．発表標題 Relics of aspect marking in Latin
３．学会等名 Kyoto Indo-European Roundtable in honor of Kazuhiko Yoshida（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kanehiro Nishimura
２．発表標題 Fors and fortuna: Linguistic and cultural aspects
３．学会等名 19th International Colloquium on Latin Linguistics（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Kanehiro Nishimura
２．発表標題 'Day' and 'night' in Latin: Formations of their adjectives and adverbials
３．学会等名 Kyoto Workshop on Indo-European Linguistics（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 Teigo Onishi and Kanehiro Nishimura
２．発表標題 On flammifer-type compounds in Italic
３．学会等名 28th Annual UCLA Indo-European Conference（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 西村周浩
２．発表標題 ことば・因果・神話 ―人類史の１ページ―
３．学会等名 神戸市外国語大学研究者招へい講演会（招待講演）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考